

# 大隅諸島における薬用植物

山本宗立

## Medicinal Plants in the Osumi Islands

YAMAMOTO Sota

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター  
*Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University*

### 要旨

屋久島および種子島における薬用植物に関する文献調査をおこなった。ゲンノショウコ、ヨモギ、ツワブキ、ドクダミ、ガジュツ、ノブドウ、カキ、アロエ、マクリ、ホウセンカ、柑橘類、チドメグサ、トウモロコシ、ユキノシタなどが両地域において幅広く知られる薬用植物だということが明らかとなった。

### はじめに

薬用植物は伝統知の集約であるとともに、近代医薬としての潜在的な価値を持っている。飛び石状に続く鹿児島島の離島においては、薬用植物に関する伝統知に連続性があるのか、固有性が高いのか、非常に興味深い。そこで、大隅諸島における薬用植物に関する文献調査をおこなった。

### 方法

鹿児島大学附属図書館に収蔵されている書籍、特に種子島および屋久島の民俗に関する書籍を参照した。薬用植物の情報が得られた文献は『西之表市百年史』、『中種子町郷土誌』、『増田の民俗誌』、『わたしたちの種子島 民俗編』、『南種子町郷土誌』、『屋久町郷土誌第一巻～第三巻』、『屋久島麦生の民俗誌 II』、『屋久町の民俗 II』である。『種子島民俗 14, 19』、『二十番郷土誌』、『現和の郷土誌：明治百年記念』、『南種子の民俗調査』、『屋久町誌』、『上屋久町郷土誌』、『上屋久の民俗調査』からは情報を得ることができなかった。

## 結果および考察

種子島3地域（西之表、中種子、南種子）および屋久島15村（栗生、中間、湯泊、平内、小島、尾之間、原、麦生、高平、平野、春牧、安房、松峯、船行、永久保）における薬用植物の情報が得られ、100種以上の植物を薬として利用していることが明らかとなった。紙面の都合上、すべての地域において幅広く利用されている植物を紹介する。

1. ゲンノショウコ（フウロソウ科フウロソウ属）
  - ・ 経口（飲む）：胃痛、腹痛、胃腸薬、下痢、赤痢、便秘、風邪薬、解熱、消炎薬、高血圧予防、冷え性、血の道、婦人病、万病
2. ヨモギ（キク科ヨモギ属）
  - ・ つける：血止め、切り傷、ヒエヌキ（膿出し）、イボ、虫歯、耳垂れ
  - ・ 経口（飲む）：風邪、解熱、腹痛、胃腸病、虫下し、十二指腸虫、高血圧、神経痛、胸焼け、万病
  - ・ 灸など：腰痛、ムクミ、肩こり、関節（水たまり）
3. オオバコ（オオバコ科オオバコ属）
  - ・ つける：腫れ物、ヒエヌキ（膿出し）、打ち身
  - ・ 経口（飲む）：風邪、咳止め、百日咳、喘息、腹痛、下痢、心臓、高血圧、利尿、解毒剤、婦人病、膀胱炎、目の充血、万病
4. ツワブキ（キク科ツワブキ属）
  - ・ つける：腫れ物、ヒエヌキ（膿出し）、打撲、切り傷、草まけ、蜂のさされ、痔
  - ・ 経口（飲む）：魚の中毒、毒消し、腹痛、下痢、健胃、食あたり、神経痛、胸焼け
5. ドクダミ（ドクダミ科ドクダミ属）
  - ・ つける：腫れ物、ヒエヌキ（膿出し）、イボ、耳垂れ、草まけ
  - ・ 経口（飲む）：毒消し、虫下し、痛み止め、腹痛、蓄膿症、利尿、便通、高血圧予防、万病
6. ガジュツ（ショウガ科ウコン属）
  - ・ つける：ヒエヌキ（膿出し）、打ち身、捻挫
  - ・ 経口（飲む）：腹痛、熱さまし、健胃、胃腸病、下痢、胸焼け、神経痛
7. ノブドウ・ヤマブドウの類（ブドウ科）
  - ・ 目の充血や目をついたときに目薬として（例：カズラの節間十五センチぐらい切り取り、切り口を吹いて出る液を眼の中に入れて洗う）

種子島の3地域のみでカンラン（じんましん、中毒、食中毒）が薬として利用されていた。一方、種子島では利用されず屋久島（3村以上）のみで利用されていた薬用植物は、アコウ（できもの、打ち身）、アマチャズル（高血圧、神経痛）、イソマツ（神経痛）、ギシギシ（皮膚病、水虫）、グアバ（糖尿病、高血圧）、クコ（高血圧、腹痛）、サトイモ（蜂や虫刺され、捻挫）、サンキライ（咳止め、糖尿病、毒消し）、ジャガイモ（火傷）、スイカ（利尿、腎臓）、ダイコン（捻挫、骨折、発汗）、ツバキ（切り傷、ヒエヌキ）、ニンニク（疲労回復、精力剤）、ジフテリア、腹痛、万病）、ヒョウタン（打ち身、打撲）、ビワ（高血圧、糖尿病、腎臓病、神経痛、万病）、ヤクザサ（癌）であった。今後、他地域における薬用植物利用と比較し、各島の特徴を明らかにしたいと考えている。

最後に、著者がこれまで重点的に調査をしてきた唐辛子の利用について報告する。大隅諸島における唐辛子の方言名は「コショウ、タカンツメ」（『種子島方言辞典』）、「こしょう」（『中種子町郷土誌』）、「コーショウ」（屋久島平内村、『屋久町郷土誌第一巻』）であった。九州以南の唐辛子の方言名は「こしょう系」に属する、と山本（2010）は提唱しているが、その仮説を支持するものであった。唐辛子の薬用については、『屋久町郷土誌第三巻』の安房村の項に「打ち身のとき、トイシ草とタマゴ・メリケンコ・焼酎・コショウなど七品をすり合わせて患部につける」とあったが、この「コショウ」が唐辛子なのか胡椒なのか、判別がつかなかった。奄美以南と比較して唐辛子の薬用例が少ないように思えた。『中種子町郷土誌』に「こしょう（唐がらし）を軒にかけておくとやはり病気がこない」という魔除けの利用があった。奄美諸島では唐辛子を焼酎に漬けて腹痛の時に飲んだり、足が痙攣した時に塗ったりすることが知られている（YAMAMOTO 2013）。大隅諸島では唐辛子の事例はなかったものの、イソマツやアロエ、アザミ類、ビワを焼酎に漬けて薬として利用していた。沖縄では泡盛に唐辛子（特に島唐辛子）を漬けた調味料「コーレーグース」が利用されているが、この調味料も薬用からの派生の可能性がある。

## 引用文献

- 広瀬陽子 1987. 屋久島麦生の民俗誌Ⅱ, 66頁, 広瀬陽子, 鹿児島.  
 鹿児島大学法文学部文化人類学研究室編 1984. 増田の民俗誌, 214頁, 中種子町立歴史民俗資料館, 中種子町, 鹿児島.  
 鹿児島大学法文学部文化人類学研究室調査 1989. 屋久町の民俗Ⅱ, 290頁, 屋久町教育委員会「郷土誌編さん室」, 屋久町, 鹿児島.  
 南種子町教育委員会編 1960. 南種子町郷土誌, 86頁, 鹿児島県熊毛群南種子町教育委員会, 南種子町, 鹿児島.  
 中種子町郷土誌編集委員会編 1971. 中種子町郷土誌, 1078頁, 中種子町, 鹿児島.  
 西之表市文化財保護審議会編 1981. わたしたちの種子島 民俗編, 85頁, 西之表市教育委員会, 西之表, 鹿児島.  
 西之表市編纂委員会編 1971. 西之表市百年史, 528頁, 西之表市, 鹿児島.  
 植村雄太郎 2001. 種子島方言辞典, 375頁, 武蔵野書院, 東京.

- 屋久町郷土誌編さん委員会編集 1993. 屋久町郷土誌第一巻 村落誌 上, 1359 頁, 屋久町教育委員会, 屋久町, 鹿児島.
- 屋久町郷土誌編さん委員会編集 1995. 屋久町郷土誌第二巻 村落誌 中, 963 頁, 屋久町教育委員会, 屋久町, 鹿児島.
- 屋久町郷土誌編さん委員会編集 2003. 屋久町郷土誌第三巻 村落誌 下, 1157 頁, 屋久町教育委員会, 屋久町, 鹿児島.
- 山本宗立 2010. 薬味・たれの食文化とトウガラシ—日本. トウガラシ讃歌 (山本紀夫編著), 235-246, 八坂書房, 東京.
- YAMAMOTO, S. 2013. Chili Peppers in the Islands of Kagoshima. In: The Islands of Kagoshima (Eds. KAWAI, K., TERADA, R. and KUWAHARA, S.), 38-42, Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima.